

日本人の國際理解・關心の偏向

最近年の日本は、世界の中にて、如何なる動きを示すや。平成二十年より二十五年の間の、日本の貿易を見む。この五年間に、日本の貿易規模やや縮小せり。輸出と輸入の合計、平成二十年は百六十兆圓、二十五年は百五十一兆圓なり。

貿易相手國を見るに、韓國、中國より、東南アジアまでの東アジア、五年間に四十四パーセントより、四十八パーセントに増加せるに對し、歐米、即ちアメリカ、カナダ・濠州・ニュージーランド、ヨーロッパ聯合、三十二パーセントより二十九パーセントに減少す。

同期間に日本に來訪せる外國人は如何。全體は、平成二十年九百十五萬人より、二十五年一千二百二十六萬人に増加せり。そが内譯、五年間に東アジア人、七十四パーセントより七十九パーセントに増加、歐米人、二十四パーセントより十九パーセントに減少す。

この貿易と來訪外國人數の統計の、われら今の日本人に教ふるは何ぞ。物の交易、人の交流雙方に就き、日本の、近隣アジアとの關係を深めつつあるを示す。今や物の交易は、全體の半分近く、人の交流に至りては全體の八割、韓國、中國より、東南アジアまでを相手とす。これら近隣諸國との關係の頓に緊密化する最近年の趨勢、恐らくは不可逆なるらむ。

されど多くの日本國民、果してそれを實感すや。日本の國際關係、物の交易の半ば、人の交流の八割は、近隣アジアとの關係にして、今後も斯かる趨勢の續くのみならず、更に強まることあるべきを、眞に實感もて了解し得るや。

近年まで、われら日本人の「國際」なる語を用ゐる、第一義的、且つ經常的に、歐米を想定し、近隣アジアは、含意せられざりき。一頃われら、「國際」なるものに憧れ、學び、日本は須らく國際化すべしと喧傳せり。されどそは、直截には、日本を歐米化すべしとの意にして、近隣アジアは、念頭に無し。

明治期の日本、國土の周圍に犇々と、歐米の脅威の迫るを見たれば、歐米に學ばずして、國の獨立を保持し得ざるを、切實に感じ、歐米に學ぶを國是とせり。

われらをして、斯く歐米に學ばしめたるは、切實なる國防意識なりき。されど國防意識強かりしが故に、軍備は自衛の限度を超え、過度に増強せらる。また歐米に學ばんとせるわれらが心裡に、密かに潜入せるは、歐米至上意識なりけむ。かるが故にわれら、自らの立脚點を忘失し、歐米人が歐米中心主義・有色人種蔑視感覺を、自らの身に附けたるべし。大正・昭和の日本、アジア大陸に軍事進出し、未は大陸と太平洋の、腹背に敵を受くる無謀なる戰爭に突入、古今未曾有の敗戦と、國土の、外國軍による占領を招く。そは、無念の極みなり。されどわれら自身が自業自得の嫌ひ、無きにしも非ず。

古今未曾有の敗戦と、外國軍による占領の衝撃、われら日本人に、底知れぬ屈辱を味ははしめ、意識を混濁せしめたり。斯くしてわれら、占領軍が占領政策、われらが意識の根

底に、歐米至上視、日本・アジア蔑視の感覺を植ゑ附くるを、唯々諾々と甘受しつ。

對日講和條約交渉を主導せる、後のアメリカ國務長官、ジョン・フォスター・ダレス、明治以來の日本人が對アジア（中國）優越意識を利用し、日本をアジア（中國）より切り離して、歐米に依存せしむるを以て、交渉の基本方針とす。

その後も今日に至るまで、アメリカが一貫せる對日政策、日本のアジアよりの切斷、歐米への依存の助長なり。こは、必ずしもわが國及び國民の利益ならざりしも、日本の現状、アメリカが政策の成功を示すに非ずや。

敗戦後の占領終結し、再獨立せるより、さして間無き一九五五年、日本は、インドネシアがスカルノ大統領の招集せるアジア・アフリカ會議に出席す。そは、アメリカのこれに反對するの意向に抗する行動なれど、當時の鳩山首相と重光外相、それを強行す。

十年後の一九六五年、第二回のアジア・アフリカ會議、アルジェリアのアルジェ開催の豫定なりしも、直前に、恐らくはアメリカとフランスの工作により、アルジェに軍事クーデター發生し、開催せられず。日本のアジア・アフリカとの聯攜の場、これが爲失はる。

一九六〇年代に、世界の國を、Developed Countries と Developing Countries に分別する慣行、國際的に確立せり。日本は前者に所屬すれば、國際聯合等の場にて、前者グループの一員として、後者グループとの折衝に臨む。

日本國內にては、Developed Countries は「先進國」と翻譯せられ、日本は「先進國」なりとの意識、ジャーナリズムと學校教育を通じ、國民の間に深く浸透す。

Developing Countries は、公式には「途上國」と翻譯せらるれど、「後進國」なる呼稱、口頭にては、廣く用ゐられたり。斯くて日本は「先進國」、アジア等の國は、當時未だ「途上國」なりし韓國を含め、遅れたる國として、下に見る心理、牢固たるものとなれり。

一九九〇年代より二〇〇〇年代に掛け、我、學業水準も意識も、日本の大學の平均水準なる大學に教鞭を執る。教職にありて我知り。日本は「先進國」なれば、「先進國」民たる日本國民は、そが故に自づから、アジア人より上の人間なりとの心理、學生は固より、教師、事務職員を含めたる大學全體に深く根附きて、抜き難き固定觀念となれるを。

アジア人を下に見るは、必然的に、日本より先の「先進國」たる歐米を、上とする心理を隨伴す。されば一九九〇年、二〇〇〇年代の我が大學にありては、學生は固より、多くの教師、事務職員等、アジアの知識叢きを恥ぢず、競ひて歐米に關する知識經驗を誇示す。アジア人留學生に無關心にして、少數の歐米人留學生に、卑屈に見ゆる程氣を遣ふ。

そが例外なる教師はあれど、事務職員にほば例外無ければ、大學當局が對應、日常的に、アジア人留學生に不親切、ぶつきらぼう、歐米人留學生に、過度に丁寧なりき。

そは、豈大學に限らんや。社會全般のことにして、在京のマレイシア人留學生より、各國留學生の日本傳統文化を學ぶ會を結成し、そが會長たりし時の話を聞きしことあり。

ある時渠、會員らとともに、歌舞伎を見んとて、歌舞伎座に赴く。事前に通報し置きたれば、歌舞伎座支配人、一同の到せるを出迎ふ。渠、會長なれば、學生らの先頭に進み、支配人に握手せんと手を出す。されど支配人、渠を無視し、背後に進みたる白人アメリカ人にこやかに笑み掛け、歡迎の挨拶す。恰も渠の存在、眼に入らざるが如し。渠、呆氣

に取られて、怒るを忘れたりとしつつも、日本人の本性見たりと、笑ひつつ語れり。

今この頃より十年以上を経ぬ。その間國內に、アジアの知識を廣め、アジアへの關心を増大せしむる努力、なされたるを聞かず。されど我、日本人のアジア人を見る姿勢、その後些かは變化せるを期待す。然らざればわれら、近隣諸國との關係緊密化の趨勢に、對應し得ざること、火を睹るより明らかなればなり。

たまたま七月二十二日朝、NHKラジオの、本年上半年期の訪日外國人觀光客數急増を報じ、こは日本經濟によきニュースなりとて、外國人觀光客誘致策の要を説くを聽けり。具體的誘致策とて擧ぐるは、國內各地への英語案内設置増大、バックパッカーが爲の、廉價なる宿舍提供、パリ、ニューヨーク、ロスアンゼルス、クアラルンプール(?)へのアンテナショップ開設なりき。嗚呼。訪日外國人觀光客の八割は韓國、臺灣、中國、東南アジアより來り、歐米人は二割以下なるに、われらが眼、今尙歐米のみに向くこと、斯くの如し。

(平成二十八年九月二十六日受附)